

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：11201  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2013～2020  
課題番号：25780538  
研究課題名（和文）自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究 幼児期からの発達と青年期以降の支援

研究課題名（英文）Self-understanding of people with ASD: developmental support from early childhood to adolescence

研究代表者  
滝吉 美知香 (TAKIYOSHI, Michika)  
岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：00581357  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自閉スペクトラム症（ASD）者の自己理解の特徴を学校在籍の視点から明らかにすること、及び、ASD者の自己理解に影響する典型発達（TD）者との関係について明らかにすることを目的とした。前者については、ASD者へのインタビュー調査より、在籍や進路を主体的に選択した感覚の獲得と、現在の自己の肯定による過去のネガティブ経験の捉え直しの重要性が示唆された。後者については、幼年期TD児におけるASD児への認識と態度、思春期青年期TD者自身の自己理解とASD理解、青年期TD者におけるASD理解と支援への自己関与意識、それぞれの検討をとおして、各発達期や状況に対応した関係調整支援について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
コミュニケーションや感覚の特異性を示すASD児者は、従来、他者との関係性の中で自己についての理解を深めアイデンティティを確立していくことの脆弱性が指摘されてきた。ASD者個人内に障害を起因させその困難さを明確化することに主眼が置かれた一連の先行研究に対し、本研究では、ASD児者を取りまく周囲の同年代の他者におけるASD児者に対する理解や振る舞いに着目し、両者の関係性をつなぐという視点からASD児者の自己理解をめぐる状況の明確化と支援について検討を行った点に、学術的意義および社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the following: the characteristics of self-understanding of people with Autism Spectrum Disorders (ASD) from the perspective of school enrollment, and the relationships with others that influence their self-understanding. The results of the first survey suggested that the importance of gaining the feeling of independent selection of career path and recapturing the negative experiences of the past were influenced by affirming their present self for people with ASD. In the second case, we conducted three studies to examine Typical Development (TD) children's perception and attitudes toward children with ASD, the correlations between understanding ASD and self-positiveness in adolescents with TD, and the self-involvement attitude of university students regarding support for students with ASD. We discussed how to help coordinate the relationships between people with ASD and others according to their development and circumstances.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉スペクトラム症 自己

## 1. 研究開始当初の背景

障害者基本法の一部改正(2011)、障害者差別解消法の施行(2013)、学校教育施行令の一部改正(2013)等、障害をとりまく法整備が行われ、共生社会の実現に向けた取り組みが進められるつつある時代背景にある。そのような中、コミュニケーションや体性感覚に障害特有の困難さを示す自閉スペクトラム症(ASD)児者は、通常学校・学級に在籍することや、通常と特別支援学級・学校との在籍変更を経験することが多い。障害特性に起因する対人関係の構築・維持の苦しさによって、他者との比較や他者の言動を参照しながら自己についての理解を形成・促進していくことに脆弱性がある(滝吉・田中, 2011a; 2011b) ASD者にとって、学校在籍やそれに関連する変更等は、ASD者と非ASD者との曖昧な境界域の中で自己を探索し確立していくことをより困難にしていることが予測される。ASD児者における自己理解の脆弱性は、ASD児者にとっての心理的不安や混乱の要因となるのみではなく、非ASD児者によるASD児者への理解をも難しくし、共生社会の促進を阻害する要因となってしまう。このことから、他者との関係性という視点からASD者の自己理解に着目し、幼年期から青年期までを発達の視点からとらえたうえで必要な心理的支援について検討する研究を開始した。

## 2. 研究の目的

本研究は、ASD当事者を対象にその自己理解の特徴を明らかにすること【1】と、ASD者の自己理解に影響を与える周囲の他者との関係について明らかにすること【2】を通して、当事者への心理的支援および周囲との関係調整支援について考えることを目的とした。

【1】については、①ASD当事者が学齢期を振り返り自身の在籍や対人関係をどのように理解し、それが現在の自己とどのように結びついているのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、ASD者がいかにネガティブな経験のとらえ直しや、主体的に在籍や進路を選択したという感覚を獲得・促進し得るのか、学校在籍に関するエピソードの聴取と現在のアイデンティティ確立度を調査することによって関連を検討することとした。

【2】について、典型発達(TD)者を対象に、下記3つの目的に応じた研究を展開した。

②幼年期のTD児における、ASD児に対する認識と態度を明らかにする。具体的には、障害特性によって積極的に他児との関係を築きにくいASD児に対し、同年代の他児の認識と態度を検討することをとおして、両者のコミュニケーションを促進するための手立てを考案することとした。

③思春期・青年期のTD者における、TD者自身の自己理解とASDに対する理解がどのように関連するのかを明らかにする。具体的には、TD者の自己肯定意識とASD理解との関連について横断的検討(研究Ⅰ)を行ったうえで、その関連のしかたはTD者とASD者の実際のかかわり経験を経てどのように変化するのかについて縦断的検討(研究Ⅱ)を行うこととした。

④青年期のTD者における、ASD者に対する理解および積極的な関係構築を促進する要因について明らかにする。具体的には、ASD学生への支援に対する一般学生の自己関与の意識について、ASDに対する主観的・客観的理解度と、かかわり体験の内容という点から、検討を行うこととした。

## 3. 研究の方法

上述①～④ごとに研究方法について述べる。

- ① 高校以上のASD者54名(16～33歳。男性43名、女性11名)を対象とした。アイデンティティ尺度(下山, 1992)の実施、および、半構造化インタビューによる、小学校から現在までの学校や学級、または職場等への在籍や所属と、それぞれの在籍・所属中の印象的なエピソードの聴取を行った。その中で対象者が最もネガティブな経験として想起した出来事について、「出来事を中心性尺度(the Central of Event Scale; CES)」(Berntsen & Rubin, 2006; 2007)を実施した。
- ② ASD児(以下A)の在籍する幼稚園年中クラスTD児22名(男児10名、女児12名)を対象とした。グリッドテクニック(Kelly, 1955)に基づく手順を組んだうえで、顔写真やイラスト

のついで磁石等を使用した個別インタビューを実施した。質問内容は先行研究（高橋，1995）に倣い、「一緒に遊びたい」という遊びの共感が成立する場合は高好意度，成立しない場合は低好意度とした。行動観察は，自由保育場面（60～90分）における参与行動観察を週2～3回約3か月間実施した。教室内定点カメラで録画した計約33時間の映像記録から，TD児とAのかかわりがみられたエピソードを抽出し（計198），10カテゴリーに分類した。

- ③ **研究Ⅰ（横断的検討）**：大学生189名を対象に質問紙調査を実施した。ASD理解については，滝吉・田中（2011）を参照し，自閉症スペクトラム指数（AQ）項目評定（若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright，2004）を基にした尺度を実施した。また，ASD者とのかかわりの程度やASDに関する学習機会の程度についても調査した。さらに，自己肯定意識尺度（平石，1990）を実施した。回収したデータのうち，記入漏れのない160名の回答を分析対象とした。

**研究Ⅱ（縦断的検討）**：17～18歳のTD高校生9名（女性7名，男性2名）を対象とした。4つのグループを設定し，それぞれに対象者2～3名，17～23歳のASD者6～9名，教員学生等スタッフ7～10名が参加した。各グループ固定メンバーで月1回1年間，各期11～12セッション実施した。1回のセッションは約1時間半，毎月固定曜日に開催した。グループ開始前と終了後に，評価スケールとして，ASD理解質問，自己肯定意識尺度（平石，1990），自意識尺度（菅原，1984），共感経験尺度改訂版（角田，1994）を個別に実施した。

- ④ 大学生271名を対象として質問紙調査を実施した。障害に対する理解度について，主観的理解度（あなたは『発達障害』という障害についてどのくらい理解していると思いますか）および客観的理解度（あなたは今まで授業や講演会などで『発達障害』について聞いたことがありますか）について，それぞれ4件法で回答を求めた。また，発達障害児・者との実際のかかわり体験，かかわりの頻度，親密感についても，それぞれ4件法で回答を求めた。発達障害学生に対する支援例として，山本・仁平（2011）および日本学生支援機構（2012）を参考に，一般学生が参加しやすく身近な支援と思われるものを計8項目設定し，各項目の許容度と自己関与度を調査した。

#### 4. 研究成果

研究成果については，それぞれ下記の研究発表・研究論文等にて公開している。

- ① 滝吉美知香「自閉スペクトラム症者における学校在籍と自己理解—過去のネガティブな体験に対する意味づけと現在のアイデンティティとの関連」日本発達心理学会第32回大会，ポスター発表，Web，2021年3月

**成果の概要**：小学校から高校までの在籍は，A：常に通常学級に在籍7名，B：常に特別支援学級・学校に在籍17名（※小中で特別支援学校に在籍した者無し），C：通常学級から特別支援学級・学校へ変更26名，D：特別支援学級から通常学級へ変更2名，E：通常学級から特別支援学級，特別支援学級から通常学級のどちらも経験2名であった。アイデンティティ（Id）得点とCES得点について，欠損値のあった2名を除く52名の得点を，それぞれの平均値（Id得点27.17；CES得点21.90）を基準に高群と低群に分けた。アイデンティティ達成度が高く在籍に関するネガティブな出来事の重要性を認識している群（H/H）は，17名中13名が通常学級も特別支援学級も体験している者（C，D，E）であった。例えば，小学校で通常学級，中学で特別支援学級に在籍した対象者のひとは，中学のとき「（特支）教室の前でドアを蹴っていた人を見て，見下されていると感じた」というネガティブな出来事を語りつつ，その出来事を「自分らしさとか，（趣味である）小説の内容の盛り込み要素になった」と現在の自分を理解するための重要な参照点と位置づけていた。一方，アイデンティティ達成度が低く在籍に関するネガティブな出来事を自己の中心に位置づけている群（L/H）は，10名中6名が常に通常学級または特別支援学級・学校に在籍していた者（A，B）であった。例えば，常に通常学級に在籍してきた対象者のひとは，小学生のとき教師に厳しい口調で指導された体験を「地獄だった」と表現し，「この出来事がなかったら不登校にならなかったし，そしたら発達障害の診断につながらなかったんじゃないか」と語り，過去の出来事と関連させ現在の自分を受容しきれていない様子であった。ASD者の自己理解を支える観点として，自分自身の在籍をどのように選択したり理解したりしているのか，またその在籍においてどのような他者とのかかわりを体験しているかをとらえることの重要性が示された。

- ② 滝吉美知香・三浦綾華「典型発達児における自閉スペクトラム症児に対する認識と態度の検討」日本特殊教育学会第58回大会，ポスター発表，P8-30，Web，2020年9月

**成果の概要：**A 児に対する認識として好意を示す（高好意度）群には、態度として「d.世話・手伝い」「h.突発的にかかわり」「f.空間共有」を示すことが多く、好意を示さない（低好意度）群は、「c.拒否・抑制」を示すことが多いことが明らかにされた。「d.世話・手伝い」については、受動的で周りからのほたらきかけを拒否しない A の状態像が、世話や手伝いをしたがる TD 児の言動を引き出し好意度につながったと推察された。このことから、集団編成を考える際、ASD 児の多様な状態像と TD 児の個性や関心をマッチングする視点が重要と考えられる。「h.突発的にかかわり」については、保育者側からすると、ASD 児を驚かせたり不安にさせたりする不適切な言動ととらえられがちだが、実際には TD 児からの好意が含まれていることが明らかになった。このことから、ASD 児と TD 児双方の気持ちを伝え合うような保育者のかかわりが必要となるだろう。「f.空間共有」については、A の言動に興味を示し一緒にその遊びをしたいという思いが好意につながることを示唆すると考えられる。集団保育場面では ASD 児が TD 児に合わせた言動を求められることが多い中、ASD 児の好きな遊びを全体で共有する機会をあえて意図的に設けることによって、ASD 児の好きな遊びに TD 児が興味を示すきっかけとなったり、ASD 児と一緒に遊べた感覚を促したりすることが可能となるだろう。「c.拒否・抑制」については、ASD 児の言動が自分の意図にそぐわない場合それを意思表示できる TD 児は好意を抱きにくいことが示された。TD 児の気持ちを尊重しつつ ASD 児の言動の背景をとともに考えていくなかかわりが望まれる。さらに、好意度の高さに関わらず TD 児は A 児をよく見ており普段よく行うことが多い A 児の振る舞いを認識していたことから、何かのきっかけで ASD 児が普段と異なる活動への参加や遊びの様子をみせたとき、積極的にその様子を、TD 児を含む全体で共有するかかわりの有効性が示唆された。

- ③ 滝吉美知香・田中真理 2021 「典型発達者における自閉スペクトラム症理解と自己肯定意識との関連：自閉スペクトラム症者とのグループワーク実践をとおした変容」, 発達心理学研究, 第 32 巻第 1 号, pp24-36.

**成果の概要：**研究 I では、大学生 189 名を対象に ASD 理解と自己肯定意識を調査した結果、ASD の障害特性のひとつであるコミュニケーションの苦手さに対する理解が高いほど、TD 者自身が他者との関係のとり方に対し敏感に自分自身を評価することが示された。他者との関係に積極的な自分を肯定的に評価するか、閉鎖的な自分を否定的に評価するかについて、TD 者のパーソナリティ要因と絡めて考察した。研究 II では、ASD 者とともに心理劇的ロールプレイングを行うグループワークに約 1 年間参加した高校生 TD 者 9 名を対象に、ASD 理解と自己肯定意識との関連の変化を検討した。その結果、活動後に ASD 理解得点が低下し、ASD 理解の下位領域と相関する自己肯定意識の下位領域にも変化が示された。具体的には、ASD 特性としてのコミュニケーションの苦手さに高い理解を示しながら自分自身の他者との関係のとり方を肯定的にとらえていた対象者が、活動をとおして、ASD 者のコミュニケーションの苦手さを環境要因や個人の多様性に結びつけ多元的にとらえ、自分自身の他者との関係性のとり方にも類似点があると理解するようになったことがうかがわれた。そのような変化の背景について、対象者が実際に示した活動での様子や発言の内容と併せて考察した。

- ④ 滝吉美知香・五十嵐亜子 2015「高等教育機関における発達障害学生支援に対する一般学生の自己関与意識」岩手大学教育学部教育実践総合センター研究紀要, 第 14 号, pp. 479-488.  
(滝吉美知香・五十嵐亜子「発達障害学生への支援に対する一般学生の意識」日本特殊教育学会第 52 回大会, P3-G-6, 高知, 2014 年 9 月)

**成果の概要：**一般学生は、かかわり体験のあり方や各理解度によらず、発達障害学生に対する支援への許容度は全体的に高く、その点は先行研究（生川, 1995; 菊池, 2011 ほか）の結果を支持するものであった。本研究では、許容度が高い学生のうち、さらに自分自身が支援に積極的に関与しようとする意識を持つ学生は、①実際に発達障害者とかかわった体験がある、②その発達障害者に対して親しみを感じていた、③講義や授業などで発達障害に対する正しい知識を得る機会があった、などの特徴があることが明らかにされた。このことから、高等教育機関において一般学生の発達障害学生支援に対する自己関与の意識を高めるためには、一般学生と発達障害学生がかかわりを持つ場を提供することのみではなく、一般学生が障害学生に対して親密さを感じられるような関係性の支援を行うこと、さらに、一般学生が発達障害について正しい知識を得ることのできる教育の機会を保障することが重要であるといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 滝吉美知香・田中真理	4. 巻 32
2. 論文標題 典型発達者における自閉スペクトラム症理解と自己肯定意識との関連：自閉スペクトラム症者とのグループワーク実践をとした変容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 24-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 滝吉美知香、鈴木大輔、田中真理	4. 巻 28
2. 論文標題 自閉スペクトラム症者における「気まずさ」の認識に関する探索的研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11201/jjdp.28.63	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三浦伽奈子・滝吉美知香	4. 巻 15
2. 論文標題 発達障害児の肯定的自己理解とその母親の障害受容を促すソーシャルサポート	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 301-316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15113/00014130	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 滝吉美知香・五十嵐亜子	4. 巻 14
2. 論文標題 高等教育機関における発達障害学生支援に対する一般学生の自己関与意識	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 479-488
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15113/00010848	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 滝吉美知香・三浦綾華
2. 発表標題 典型発達児における自閉スペクトラム症児に対する認識と態度の検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滝吉美知香
2. 発表標題 自閉スペクトラム症者における学校在籍と自己理解 過去のネガティブな体験に対する意味づけと現在のアイデンティティとの関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝吉美知香・五十嵐亜子
2. 発表標題 発達障害学生への支援に対する一般学生の意識
3. 学会等名 日本特殊教育学会第52回大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 滝吉美知香
2. 発表標題 青年期発達障害者の自己理解の特性
3. 学会等名 日本特殊教育学会第52回大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 滝吉美知香
2. 発表標題 知的障害のある非行少年における自己理解
3. 学会等名 日本心理臨床学会第32回秋季大会
4. 発表年 2013年

1. 発表者名 滝吉美知香
2. 発表標題 発達障害者の自己理解を支える典型発達者を育てる
3. 学会等名 日本発達心理学会第25回大会（大会ラウンドテーブル話題提供）
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 滝吉美知香・松崎 泰・田中真理
2. 発表標題 典型発達高校生における発達障害に対する理解および自己，他者理解の変化 - グループワークをととした『ナチュラルサポーター』の育成
3. 学会等名 日本発達心理学会第25回大会
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 名古屋 恒彦、滝吉 美知香	4. 発行年 2015年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 74
3. 書名 特別支援教育に生きる心理アセスメントの基礎知識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------